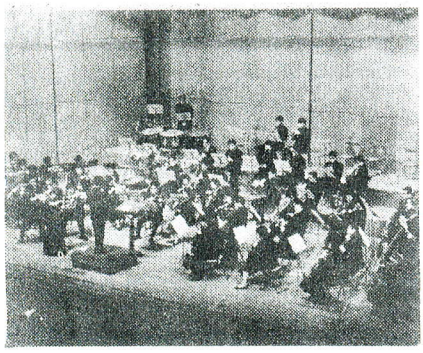
本響友会報(1964.12.1 発行)は、
紙面ｻｲｽﾞの関係でﾚｲｱｳﾄがｵﾘｼﾞﾅﾙから変更しています。

響友会報

No. 2
発行者 神戸市灘区六甲台町
神戸大学響友会

一年のあゆみ　一九六四

一月〃新年会〃歯科医師会館
今年も楽しい音楽を！
二月　頭の痛い試験勉強
三月〃ドサ廻り〃加古川、高砂
中学　楽器紹介、小演奏
〃教育学部卒業演奏会賛助出演〃神戸国際会館
四月〃新入生歓迎遠足〃森林植物園
五月〃響友会総会〃ビーハイブ
諸氏御挨拶　小演奏
六月〃新入生親睦合宿〃姫路青年の家　オケ生活が身につきました。
七月〃夏期合宿〃石川県立白山公民館　暑さに敗けず猛練習
八月三日　金沢演奏会　観光会館
〃慰安旅行〃能登半島半周
海水浴と合宿の反省
九月　試験を迎え燈下親しむ頃
十月　音楽の秋　定演に備え、練習に励む日々
一一月〃定演のための強化合宿〃
奥池ユースホステル
〃神戸女子薬大合唱演奏会
賛助出演〃
才十四回定期演奏会
十一月卅日　大阪産経ホール
十二月一日　神戸国際会館



一年の結晶を

十一月三十日　大阪演奏会
十二月　一日　神戸演奏会

細い白い指揮棒が宙に浮く。その瞬間、全会場に緊張がみなぎり、弾き手も聴き手も一つの融合体となる。その中から我々自身がこの一年間我々なりに作り出したものの総決算が、美しい調和となって流れ出て行く……。

才十四回定期演奏会をあます所、二十日間にひかえて、週三回の練習を、パート別、総合に分けて一同はりきっている。今年は専任指揮者、泉氏を迎え、伝統の学生指揮との二本立である事と、大阪での初の演奏会を行うという点で、今までには見られなかった一段階を呈した。これも過去数年の長きにわたってオケ活動をされてきた諸先輩の地固めがなければ果されなかった事である。これを契機とし、さらに神大オケが学生オーケストラとして、技術的進歩のみならず、オケメン一同のメンタルハーモニーの場として、一層発表する事が望まれる。

今年度の定期演奏会の内容を紹介すると、(1)ベートーヴェン、交響曲才五番「運命」(2)外山雄三　デイベルメント　(3)モーツアルト、ピアノ協奏曲二十六番ニ長調「戴冠式」(4)ヴイヴアルディ、コンチエルト・グロッソ才八番イ短調　の四曲であり、(1)(2)が泉氏の指揮　(3)(4)が大軒さんの指揮である。(1)の運命は度々神大オケでも演奏された曲である。一般的にもっともポピュラーなクラシックであり、非常に難しいこの大曲を我々一同、諸先輩の演奏以上のものを作り上げようとがんばっている。(2)オケメンの各個人々々の実力をいかんなく聞かせてくれるであろう。日本古来の優雅な音楽性を失うことなく演奏したいものである。(3)ピアノコンチエルトは神大教育学部の武谷先生を迎えての演奏である。(4)コンチエルト・グロッソ、二つのヴイオリンの為の協奏曲。弦の美しさが聞きものである。

続いて、指揮者、ソリストのプロフイールを紹介しよう。

大軒護君　神大法学部三年
ホルン、ヴイオリンと管弦共に名奏者である彼は、学生奏者として非常にめぐまれた才能をもっている。
定期での大任を果すと、彼の指揮者一年生時代が終る。その間色々と困難な事もあったであろうが、彼独特の音楽に対する情熱、もちまえのフアイトでもって、克服した。今後ともオケの中心となって大いに活躍してもらいたいものである。六甲台では、六法片手に学問にはげんでいる。

＝先輩方の御尽力に感謝＝

今度大阪で初めて演奏会を開くにあたって、先輩に色々とお世話いただいたが、例年の会員の方の他に凌霜会の人々に山中さんから紹介していたゞいて、配券した。当初、大阪演奏会は、五十周年を記念して行うつもりであった。しかし計算の違いで満五十周年は来年であることがわかり、名目を失った形であった。部員総会では　一回の演奏会よりも二回の演奏で人々により多く聞いてもらいたいという事で決まった。☆☆

指揮者泉氏を迎えて
ピアノ武谷安子先生

泉　庄右衛門氏

我々神大交響楽団には創立以来、アマチュア独自でやるという伝統があったが、最近の如く大学オーケストラがバッハから、ベルリオーズまでを演奏するようになると、学生が独学で指揮をするには余りにも高度な技術及び精神性を必要とする。……という結論に達し、今年度より形の上でも音楽的にもさらに前進しようとする態度で大阪フィルハーモーニーの副指揮者、泉氏をお招きしたのである。大阪市立天王寺商業高校から京都音楽短期大学に進まれ、卒業後は朝比奈隆、外山雄三両氏について、指揮法を学ばれている。

武谷先生

昭和三十一年芸大の楽理科を御卒業され、それ以後神大の教育学部で教えておられる。先生は、専門が前古典音楽であったので、演奏の中心はクラシックであるが、ロマン現代物等巾広いレパートリーを持っておられる。今度のモーツアルト「ピアノコンチエルト二十六番」は非常に軽快な曲であり、先生の軽妙なタッチが素晴しい。オーケストラ部員一同、先生の演奏の御成功を祈ると共に、我我オーケストラ伴奏も先生の期待にそうようがんばるつもりである。

藤本さん

神大理学部化学科に学ばれている才媛である。忙しい学業とオケのコンサートマスターとしての仕事を、たくみな時間さばきで両立されているのには感心する。理知的なマスクが非常に印象的であるとともにそれがヴアイオリンの音色にもあらわれ繊細な音の響きは、定評がある。

就職も製薬会社に決定され、最後の研究に細い身体を実験服につつまれすごしておられる最近である。

鳥太安雄君

彼も又、神大工学部電機の秀才。今秋専門過程にあがったばかり。目下実験、勉強に緊張の毎日を送っている。しかしヴイオリンを弾いているのが一番楽しそうである。おじいさん由来のヴイオリンで、かなでる澄みわたつた純粋な音色は実に美しい。その誤魔化しを知らない正確な演奏態度は、オケの模範である。しらふでは、一見おとなしい感じをうけるが、アルコールがはいると小気味よいたんかがでてくるのは、おもしろいものである。

合奏協奏曲で、藤本さんとのヴイオリンの音色の調和が聞きものです。

定期演奏会と冬期合宿

十一月三十日（月）の大阪サンケイ・ホールでのステージ、十二月一日（火）の神戸国際会館でのステージを控え、その総括的な訓練のため、芦屋ユース・ホステルで合宿を行なう。寒さも度をくわえつつある十一月廿一日(土)から廿三日(月)まで、そこにカンヅメになるわけであるが、普通の学校での練習ではやれない種々のサークル活動を実現して行くべく、我々神大オケの総合的な実力をやしなうのである。一年間の結晶としての定演をその表面的な成功のみでなく、サークルの本質的な意義を、この演奏会という形に結集するのであるから、この行事のもつ意義は大きいものであろう。サークルの組織目的とみなされる、この定期演奏会の本質的な意義をよく果させるためにも、この冬期合宿のやり方はよく考えて実施する必要がある。やはり音楽技術のみの訓練だけでは、その任務をはたしたとはいえないであろう。その過程に種々のサークルの本質をおりこむ事が重要なのである。一面きびしいと思う訓練の中に我々サークルの内在的欲求がおりこまれることこそ合宿の使命である。こういう観点からみての合宿のもつ意義を部員諸君はよく自覚してほしいものである。合宿は演奏会のための行事ではなくそれ自身意義をもつのである。

響友会総会開かれる

五月三十一日元町ビー・ハイブで才三回の総会が開かれた。月末の日程が災いしたのか、予想した程の先輩に集まってもらう事ができなかった。学生十余名と先輩十余名が集い山中直一氏、橋本宗夫氏、西村俊一氏の戦前の方、戦後の千葉修二氏を初めとして次々挨拶の後食事を始めた。ビー・ハイブの女主人に聞いた処では、その昔高[illegible]奈良夫氏らが、学生の頃演奏会の広告をとりに来られ、今の主人が娘時代に広告を親の目を盗んでしてくださったという話である。今更ながらに、オーケストラの息の長さを知った次才です。オードブルと同時に、学生と先輩を交えて日頃の腕をおみせし、又食欲をそそるのを？　もくろみ小曲を演奏した。先輩の小島、渡辺氏のフルート二中島氏によるチエロソロ富田良吉氏を含むデイベルティメント　学生によるフルートソナタ　最後に橋本宗夫氏によるバイオリンソロで　なごやかな会食を終えることができた。

会計報告において響友会の財産目録を作るべきでないかとの意見を聞き、会費によって買った楽器の所在をはっきりする事が必要とされた。総会の重要な行事である会計報告もさる事ながら、もっと先輩方同志の交際の場として　響友会が盛んになればとおもいます。戦前派と戦後派のちがいがあります。戦後の先輩の間では、横のつながりの強い学年が数多くあると聞いています。そのような学年では、年に何回か集まって話したり飲んだりするそうです。この親密な関係を基にして大学生活をオケ活動に集中された方々で活かし先輩のための響友会（オーケストラOB）が、一層活発に運営されるべきではないでしょうか。現役学生は、そのための御手伝いをするつもりです。

今年は金沢で

夏期合宿

ネオンに輝く夜の大阪を、静かに動き出した汽車とともに、我々の合宿は始まつた。遠足に行く一年生のように、はしゃいで眠られぬ車中での一夜を過ごして、翌朝、金沢に着く。楽器と荷物の間に坐りこみ、バスで街を離れる。バスから降ろされヤレヤレと思う間もなく、小石のゴロゴロした坂道を登らされ、やっと宿舎へ（石川県立白山公民館）。そこは緑に囲まれた、古い木造の建物。小さな池があり、赤や黄の花が咲いている中庭を取り囲んで、いくつかの畳の部屋が並んでいる。各自部屋に落ちついてから、一同練習室に集まり、楽器を取り出し、いよいよ練習開始。ものうい夏の昼下り、さまざまな音が暑さに挑戦する。ヘンデル「水上の音楽」―水に浮んだ小舟は大揺れ―シューベルト「未完成」―ニコライ「ウインザーの陽気な女房達」序曲―おしゃべりと笑い声―モーツアルト「ヴアイオリン協奏曲」―明るい旋律―シュトラウスのポルカ―西部劇の打ち合い―練習と食事に追いかけられる合宿生活が、すでに始まつたのだ。

規則正しい毎日、朝六時半起床、七時、玄関前に集合、すがすがしい朝の空気を吸つて、国旗掲揚とラジオ体操。それから朝食、朝の練習、昼食、午後の練習、夕食、夜の練習ミーティング、十時消燈、一日が終った。音楽を作り上げるためには、どれほど汗を流し、蚊にかまれねばならないことか！

毎日、練習室からは、優しいヴアイオリンの音、鋭いトランペットの音、さまざまな音が流れてくる。そして練習の合間には、ピンポンに興じたり、〇〇レターを書いたり、楽譜を写したり……

ある日の夕方、練習からしばし解放されて、宿舎の小高い丘から見渡せる川辺へ。しだいに沈み行く太陽の下で、大きなスイカを二つ、冷たい川の流れに浸す。サラサラした砂の上に、一同坐り、フアイアーストームを囲む。パッと燃え上つた炎に照らし出されたみんなの顔が笑つている。歌を歌い、ゲームをし、スイカをほおばり、果ては、川のせゝらぎを伴奏に、全員、神オケ十八番の〝佐渡おけさ〟を踊つて、楽しく閉会となる。

又ある日は、食料補給に街へ出るネオンの中で、満ち足りた幸福感。夜店で花火を買う。門限に遅れ、暗やみの中をこっそり、部屋にすべりこむ。

いよいよ演奏会当日。広い立派な会場。入口の「神戸大学交響楽団演奏会」というポスターが眩しい。静かさの中に緊張がたれこめ、演奏会が始まる。拍手、拍手。三つものアンコールのサービス。興奮と解放感に酔いつゝ、花束をかかえてバスに乗り込む。暑さの中での練習と、鶴来の山奥まで来られ、演奏面のみならず、色々とはげまして下さった先輩方のおかげで、ここに演奏会も無事終ったのである。

翌日、快晴。バスで能登半島へ慰安旅行。美しい海岸で途中下車。青く澄んだ遠浅の海を歩いたり、泳いだり。二組に別れて競泳。楽しい海水浴の後、又バスに乗り込み、デコボコ道を揺られる。のどかな海とけわしい岩のすばらしい景色を見ていると、バスがパンクし、一時停車。やっと薄暗くなって、入江が見渡せる〝青年の家〟にたどりつく。冷たい夜風に当り、ギターの音に耳を傾けながら、十日間の合宿の意義を、それぞれ、静かにかみしめた。

医大合併によせて

神戸医科大学　富田武志

そもそも神戸医科オーケストラなるものは、昭和三十二年に今のコンダクターである才二外科の中山雅之先生、才二内科の宮田、天川、西村先生、インターン中の習田氏等が学生時代に組んでいたデキシーバンドがその基となり諸先生方のさそいによりオーケストラの何分の一かの小さな本当にクラッシックを愛するものの集まりが出来たのだそうです。はじめは十人たらずの集まりであつたそうですが、医大に関係した町の開業医、医大事務員、看護婦、或いは是非入れてくれと入つてきた患者さんそれに学生とが集まり毎年少しずつ人数がふえ、今では四十名弱の大きなものに成長したようなわけです。しかし何はとも今まで一度も秋のリサイタルを欠さなかつたのは喜ばしい事であると思います。このたびは神医大が神大に合併されたのを機会にオーケストラも合併してはと言う話が出た時我々の間でも色々問題がありました。しかしそのほとんどが合併によつて先輩がそだてたこの楽しい週に一度の集まりが消えてなくなりはしまいかと言うまことにごもっともな御考えであつた様です。これらの事を今のマネージャーの坂本君に話し神大も都合の良い様にはっきり合併にもちこんだのは今年の五月に開いたコンパの席上であったかと思います。それでその結果諸輩はこれまで通り週一度の集まりをもつていただこう。僕らは僕らでその集まりにも寄せていただき、かつ、神大のオケにも出席させていただこうという事になつた様なわけです。そんなわけではじめて小生が神大のオケの練習を見に出むいた時、本当にうらやましい事を沢山みさせていただきました。中でもメンバーの集まりが、医大オケとはくらべものにならないくらい良いのにはおどろきましたが、学生だけの集まりであるから、当然の事と思いました。それでは我々の集まりはどうかと言うと今のメンバー内容は医師と学生の比はおよそ2：1の様なわけです。

だから小生等練習の前の日ともなれば部員みんなで、出席していたゞく様頭をさげに行くわけです。それでもややもすると出席者十名弱と言う事がチョクチョクあるわけです。

○○○○○○○

医大の一学年は八〇名です。全部合せても三百二十名の学生です。それでもって神大なみのクラブがあります。だからたいてい三、四つのクラブをかけもっています。だから毎年オケに入る部員はごく少ないものです。しかし一度入ったらほとんど永久に練習に出れると言う楽しみがあります。おそらくこれがたのしみでみなさんつぶさぬ様がんばって下さるのだと思います。小生も医大としてオケをもっているのは全国さがしても京都府立医大と神医大の二つしかないこのユニークな存在をすえながく続けて行こうと努力しつつ後輩を一人でも多く神大オケの練習に出席させようと思っています。

今はまだ医学部と神大とはっきり言って本当にスッキリととけあってはいない様です。これはすべての過渡期に言える現象であると思います。だから医学部が神大にとけあった時こそ、両方のオケの交流もスックリ行くと思います。小生それにはさほど時間を必要としないと確心しています。

神大オケと共に

泉　庄右衛門

今年の四月五日、何か恋人に逢うがごとく、御影からバスにゆられて神大へ。海が見渡せる山の中腹、緑がいやという程目に入る。すばらしい自然に囲まれ、こんな所で音楽が出来るなんて幸せだなと思った。

「未完成」をやり始めたトタン、学生諸君の真剣な演奏態度と求楽心に燃えた目に驚く。若い人達で、ボクの棒より先へ先へと行きたい、という気持が充分にわかり、ともすると他のアンサンブルをこわすのじゃないかと思える程のファイト。それを押えるのに一苦労だ。『我々は〝学生オケ〟のパイオニアで、我々はプロにない、いゝ所を持っているのだ』というすばらしいアマチュア精神があふれている。が時々この精神が頭を出し過ぎて、エリート意識が強くなり、他の者の言う事は聞かないんだという態度が、見えないでもない。これは大変良い事だと思う。学生時代を、有意義に暮せる才一のポイントであろうと思う。我々の学生時代を思い浮べ、毎日音楽々々に追いまくられていた自分を見て、少しでもこういう精神に、ひたれたらよかったのにと、いさゝか残念でならない。五月の神戸での「未完成」は、非常にすばらしい出来であった。客がほとんどいなくなったステージで、一生懸命汗を流しての熱演、棒を振り乍ら涙が出てくるのをおさえるのに苦労した。一生涯忘れる事の出来ない、貴重なボクの音楽生活の一ページであったと思う。唯音楽にだけ頭を働かせ、他の事は何も考えないで、夢中に演奏できる事は、本当にすばらしい事である。我々も大いに見習わなければならない事だ。一つの事に熱中できる人は、他の事でもその気になればできるものだ。社会に出てからでも大いに役立つ事だと思う。表面へ出さない、内に秘めた音楽をやる心、頭の中では整理のついた音楽を、心から、お腹の底から出せるようになり、スケールの大きな音楽を一緒にやって行く事が楽しみだ。

モラール

◇グループダイナミックス（集団力学）の研究によれば、集団においては、集団のもたらす雰囲気の役割はまことに重要だということです。

愛情や血縁関係でつながる家族の間でも、充分なコミュニケーションがなければ、やはり、連帯感とか士気（モラール）というものは自然には高まらないものです。まして大きな組織をもつ集団においては、無策で集団の士気が高まるはずはありません。集団の士気は才一にその成員が自分の仕事のもつ社会的意義を理解し、才二に集団の社会的活動における自己の役割を知り、才三にその仕事の将来性について明るい見通しをもち、才四に他の成員に対してよい人間関係を保ち、かつその集団への所属を誇りとし、才五に自分と集団との利害と運命の一体感を自覚することによって高められます。

しかし士気を高めることも満足なコミュニケーションが成員相互間に存在してはじめて良い効果が期待出来るのですから、充分なコミュニケーションの方法をよく検討し、その上で、集団の繁栄のバロメーターともなりうる「士気」を高揚させることを組織運営者は心掛けることが必要となるのではないかと思います。

◇音楽活動を行う私達のような集団は、その成員がアマチュアであり、独立性の強い学生であることから利益共同体たる会社はどのようにビジネスライクに徹底したコミュニケーションおよびインフォメーションが行われることは余りなく、むしろその内容方法は杜撰である場合すらあります。わずかに上から下へ指示、命令が行われ、横の連絡として会議協議集会が開かれ、下から上へ報告提案がなされますが、それらは確固たる制度になっているのでもありません。それゆえコミュニケーションについて再認識し、その方法を再評価することが望まれ「指導」あるいは「共同研究」という教え教えられるする関係を利用して、相互理解を深める機会を設け、同時に技術の向上を計ったり集団参加意識を高めるためにバズセッション形式を大いに取入れるというように、適当な方法を導入し確立する事が要請されるのです。種々の不備が是正された後に更に大きな集団の力を生むためには個人が熱意をもち、既にある能力なり、個性的な意志なりを生産的創造的に働かせるよりしようがありません。能力や技術は、そう急には開発出来ないものだからです。（終）

ペットと私

富田 肇
38年経営卒

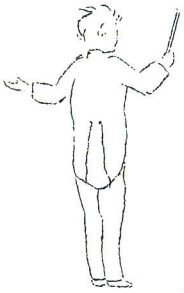
学窓を離れて早や一年半と書くと聞えが良いが実のところは五年半前からずっと学窓を離れていたようなものだった。従って『学生時代にはどんな勉強をしていたか』と聞かれる度に ラッパを吹く練習ばかりしていました、と答えるに及ぶや『そうか、それじゃ君は営業に向いているだろう』ということになり、いとも艶なる商売をやらされるに到ったのである。

勿論、希望職種は営業方面であったのだから文句は無い訳である。全くラッパ様々である。

小生とラッパとのつき合いはもう八年半にもなる。そもそもラッパと関係を結んだのは「高校三年生」ならぬ高校一年生のときであった。

最初の頃は、アルトと称する胸にだっこしてやさしい音の出るやつを相手にしていた。高校二年生になりそろそろニキビがその峠を越しかけたかな、と思う頃、突然上級生の命令でペットに転向することになった。今は、やっとそういう言葉も流行遅れ気味になったが、いわゆるコンバートされた訳だ。それからが大変。顔を真赤にして思い切り吹いても、やっと上の『ソ』の音ぐらいしか出ない。五分ほどぶっつづけに吹くとたちまちにバテテしまい、スカーとかブスーとか、なんとも情ない音しか出なくなる。しかし思いこんだら命がけという程の事も無かったが、かなり一生懸命練習した結果、その甲斐あって、どうにか音らしい音が出るようになり、そうなると又練習が面白くなるもので、とにかく一日最低三時間は吹きまくったものだった。高校三年生にもなると、そろそろラッパばかりも吹いては居られないと思ったのであるが、時既に遅く浪々の身となった。今迄で最もラッパを吹かなかったのはこの頃である。

大学に入って、オケに入った。その四年間は、全くペットに明け暮れしていた。勿論その間色々なこともしたが……。例えば、恋愛もしたし、失恋もした。重い心をかかえて近くの武庫川の川原に出、思い切りペットを吹いたこともあった。今となれば、かえってそれが懐しいほどである。そして友人も沢山できた。学生時代の最後を飾る(?)大学生活は、ペットを通じて出来上がったオーケストラ生活であったのであろう。全く有難いペット様々である。



星空のオーケストラ

若松 力
34経営卒

拝啓

相変らずの諸兄姉の御活動を耳にし、大変嬉しく思って居ります。

さて滞米中の話をという事ですが風俗習慣の異る国の事とて失敗談は数知れず、何十年という経験を一年余りの間にもった様な感じで、その経験は行って身でもって感じないと話をした所で理解して頂けそうでありません。唯、音楽に関する話としては半年のロスアンゼルス滞在中に「星空の下のコンサート」として有名なハリウッドボールのコンサートと、ロスアンゼルス在住の日系交響楽団演奏会に参加した事でしょう。

ハリウッドボールはロサンゼルスより北西にある、ハリウッドの山の中にあり、山の傾斜を利用して、野外音楽堂が設けられているのですが、何せ年に数回しか雨の降らない土地故六月九日から九月の八日まで、ぶっ通しで殆んど雨で延期になる事はありません。私の居た年は、ロジェワグナー合唱団、シュワルツマップ、コステラネッ、ハンス・リヒター、ベニー・グドマン、ホセ・イトウルビ、カルメン・ドラゴン、ニューヨークフィルボスコフスキー等の クラシックセミクラシックのプログラムがぎっしりつまり、私共の行った日はセイジ・オザワとジェワール・ハインドの演奏会で、ベルリオーズ「ローマの謝肉祭」ボロディン「交響曲二番」ハンズの歌で、ムソルグスキー、ベルデイ、ワグナー等の歌劇より、そして最後にプロコフィエフの「ロミオとジュリエト」からの抜粋でした。指揮者の関係で日本人が多勢来ていましたが、夏とは云え肌寒い夜、久し振りに楽しんだ事でした。

ロスアンゼルスには日系人の祭りとして、ニセイウイークが8月に催されます。町に屋台が出たり、ミスニセイウイークが選ばれたりで賑わうのですがその中の一つの催しとして日系交響楽団の演奏会がありました。私の指揮者の菊川暁氏の保証で町の楽器屋で月十弗の借賃を払って参加しました。何せ寄り集りですので極上等のオーケストラとは行きませんでしたが、数年前大阪の国際▼エステイバルに来た事のある、南加大学の教授のライトーさんを、独奏者に迎え、日本人の「バサデイナの庭」という新曲、ベートーベンの「交響曲第八番」ハイドンの「セロマンチエルト」をやりました。これも思い出に残る一つです。

こういう聞いたり、やったりした事の裏にはいろいろの楽しい、又苦しい経験があるのですが、それは簡単には書けそうにありません。いずれお会いする機会がありましたらお話する事に致しましょう。

皆様の益々の御発展を祈って終る事にします。

神戸大学オーケストラ殿

住所変更追加
若松 力(旧姓 坂本)
東京都港区芝新橋三ノ二〇

さまよえるオーケストラ
部屋と練習場

定まった練習場と定まった部屋。この二つはオーケストラにとって不可欠の要素である。一々場所を確かめてからでなければ練習に行けないようなオーケストラ。そのようなオーケストラには発展は望めないし下手をすれば解散の憂き目をみなければならないだろう。それと反対に練習場が安定し、練習は必ずそこで行われ、そこに行けば必ず練習しているという場合、その安心感がオーケストラを発展させる事まちがいない。いつでも自由に使えて自由に集まれて自由に音が出せる練習場。演奏技術の向上のためにもメンバーの精神的協調のためにもそれは絶対必要である。しかし、まだ私達神戸大学オーケストラにあっては　程とおい話である。けれども部屋及び練習場の問題は、いよいよ現実に考えねばならない問題になってきており、一つの画期を迎えている。以下現状を報告しよう。岡田先輩のお話では戦後我がオーケストラは、そうとうあちこちの練習場を転々としたらしい。元町の日本楽器の二階や、焼失した旧六甲台生協の二階など。そしてやっと、今の教育学部の三階音楽科の教室に仮住まいしたのが、今から四、五年前である。それ以来練習場の件は、小康を保っており、オケも安定して今日に到ったわけです。

ところが、この教育学部の練習場もあくまで仮住まいであり「他に適当な場所がみつかるまで」という条件付きである。その為最近一、二年来教育学部の音楽科の方から他に移るように迫られておりました。そこで昨年度は練習場探索委員会なるものを設けてあちこちさがしましたが、費用の点楽器保管の安全性の点、オーケストラの出す大きな音の点、永続性の点等において学外に練習場を求めるのは全く不可能である事がわかりました。そうかといって六甲台には他サークルがひしめいています。止むを得ず教育学部の寛容にすがって今日まで部屋を借りてきた訳です。ところが学舎統合にともない姫路分校から十三台のピアノが教育学部に入り、このピアノを置く場所がありません。ここに至ってオーケストラの部屋明けわたしは、現実問題として表面化してきました。私達も他に場所の心当りがないため音楽科の教官会議事務長に三拝九拝して今まで通りの使用を願いましたが、好意があっても　どうする事もできず明け渡しは必至となりました。我々もこの問題を学生課の方に持ち込みました。学生課の方でもやっと事態を重視し、積極的な動きを示し始めました。その結果いよいよこの十一月末日を定期演奏会を最後に長年住みなれた教育学部を出て六甲台の方へ移る事になりました。学生課の方では、六甲台の講堂の一部あるいは、講堂附近に楽器置場を設ける事を計画中。従って練習は、他のサークルにまじって講堂でする事になる予定です。これが現状です。六甲台は大学の中心であり学生の集合にも便利であり、その点に大きな期待をかけてはおりますが、その反面他サークルと共同で講堂を使わねばならないため、問題も多いだろうし難点も予想しなければならないでしょう。しかしこの一、二年もすれば学生会館も建設される事でしょう。そうなれば、条件は　もう少しよくなると思われます。それまで辛抱しなければなりません。私達としては、教育学部明け渡しという最大のピンチを転じて逆に練習場確保への才一歩としたいと考えています。今後、六甲台という地の利を活かした活動を続け、はじめに述べた様な理想の練習場を目指して今後も頑張るつもりです。

オケ横丁

経営オⅡ　16回生　奥田伸悟

私はこの四月からコントラバスを抱いています。まだ抱いているだけでとても〝演奏している〟ところまではゆきません。うまく音の出ない時が多い私は〝コントラバスは特にむつかしい〟と自分勝手になぐさめているのですが、実際低い音というのは何故あの様に、わかりにくいものでしょう。管の方は中・高校で六年間吹奏楽をやっていたので少しはわかりますが、弦は初めてだし、まして低音部は……　とか何とか自分の練習不足を棚に上げてなんとか正当化しようとするのですが、何と言っても私の場合練習時間が少ないというのが大きな理由です。

私は一年ですが週に一回しか練習に行きません。（本当は行きたいのですが？）高校までと違い、昼は小さな貿易会社、夜は学校という二重生活がこの四月からの私の生活だからです。そして日曜だけが唯一の練習時間であり、その時間が十九才の私が一番学生らしい時なのです。ですからなるだけ練習時間が終ってからも皆んなと一緒にいようと心がけているのですが、神大生というのはなかなか自分の生活のペースを乱して〝三宮でも、うろつこか〟という人は多くありません。パチンコ、マージャン、酒……　社会人の遊びを貧欲に吸収しようとしている〝アプレ大学生〟が多い中で〝ああ神大生はエライ〟と思い乍らも、反面なにかもの足りないものを感じるのです。何か迫力が少いような、優等生の弱さみたいなものです。もちろんこれは私の多分に一面的で短期間の感想にすぎませんので、この認識は変っていくことですし〝遊びの中から哲学は生れない〟とか〝大学生は学問に帰れ〟とか言われている今日、これが本当の大学生活とも考えられますが…。

合宿の時は本当にツラかったです。金沢から一度神戸に帰って会社の仕事をして、又金沢へ行って演奏会。どれだけ一生懸命やっても、両方（会社とオケ）とも良い様には見てくれません。少々頭に来て、合宿に出発する日に安物のウイスキーを飲んで大阪駅に行ったら悪酔してしまい、また合宿から帰る最終日には、金沢のコウリンボウとかいう所で、一人でビールをガブガブ飲んで〝合宿が何がおもしろい〟と本当に情なくなりました。それにしても一年で合宿に参加しなかった人が多かったのはどういう訳でしょう。いろいろと理由があるのでしょうが、彼等のクラブ活動に対する認識を疑いたくなります。

× × ×

今オケに入って本当に良かったと思っています。世の中には素晴らしい曲がたくさんある事をあらためて知り、もしオケに入らなかったら私の生活は狭い範囲のもので終ってしまったかも知れません。指揮者の大軒さんはモーツアルトの中にも暗い面があるとおっしゃいますが、私はまだハッキリとつかむ事は出来ません。私も早くそこまで聞きとれる様に勉強しなくてはと思っています。又いつまでもコントラバスを抱いているだけでなく良い音を出す様にならなくては……。

音楽的環境

昔話をするなどは、まだ気も多少若いつもりでいる私には、老人めいて片腹痛い心持もするのであるが、私の育った明治三十年代の後半頃（一九〇三）から私が神戸高商を卒業する大正八年（一九一九）まで頃の大阪や神戸の生活の音楽的環境を思い出して見るのも面白いかと思って一寸書いて見た。因り思い出すままに、考証もせず系統立った話でもない、簡単な雑駁なものであるが御諒承を願いたい。

幼き頃

明治三十六年に大阪市で、才五回内国勧業博覧会というものが開催された。西欧先進国の文化産業の啓蒙的な展示であり、最も新しいアミューズメントの紹介でもあった。私の幼いときの事で産業的な展示ではアメリカあたりの素晴しく大きい機関車など、しか覚えていない、今の大阪市美術館の立っている場所にあった、木造の美術館の東の方に立っていた塔には、エレベーターで上ったし、茶臼山の池には、ウオーターシュウトが設けられ、メリーゴーラウンドという耳新しい名前の遊び場では、オルゴールの様なきれいな音が真中から聞えてきた。美術館の西の下手の広場の中央に、相撲の土俵を一回り大きくした大きさの音楽堂が設けられて陸軍才四師団の軍楽隊がここで時々演奏をやった。この時私は生まれて始めてハーモニーを持った音楽を聞かして貰ったのであった。何しろ五才の時の事で大した感動をけた覚えもないが、何となく異国的と感じ取れる味の変ったものと受取ったと記憶している。劉喨たるという漢語の形容詞には、どうも金管によるハーモニーの感じがあるように思う。そのずっと奥に昔始めて聞いたブラスバンドのハーモニーがある様だ。

この時分の音楽的環境はどうであったか。家庭では（私は大阪の南船場の生れ）めったに音楽を聞くことはなかった。父が時々謡曲をうなるのと、祖父の誕生の祝に、仲居さん（やとな）を招んで酒間の斡旋をさせていたが、興が乗ると彼女等の三味線が鳴り出して道頓や、義太夫のさわりや、さわぎ唄が歌われた位のこれは年に一度の出来事に過ぎなかった。

後年妹達が小学校へ行く事になると、祖母が彼女達に琴を習わせた。「六段」とか「黒髪」「越後獅子」などの古典の外「千鳥の曲」とか「春の曲」などの新曲をよく耳にしたものである。家庭外では道頓堀の芝居の下座のお囃子、文楽の浄瑠璃。この時分からそろそろ唄われ出した艶歌師のうた、それから祖母の所へ来るめくら按摩の熊はんというのが覚えて来て聞かせる「さのさ節」や「しののめのストライキ」などというはやり唄。

小学校では五年（私のクラスが才一回の五年生となった。だから四、五、六と三年間最上級で威張ったわけだ。）ぐらいになった時ピアノがその小学校の唱歌教室に据わった。美しい音だと思った。併し学校の先生達は、両手の指を一本づつ使ってメロデイをひくのがせいぜいであったようだ。

小学校の末年に祖母がハーモニカを呉れた。ホーナーの製品だったから音も確かで音色も勿論よかった。これが私が家に入った最初のハーモニーであった。音を探し出して唱歌のメロデイを吹く楽しみの間、多数の孔を一緒に吹いたり吸ったりしていると、楽隊を聞く思い――それも高級な軍楽隊――がした。これが私には、ハーモニーを楽しみ、高度の音楽に対する、ほのかなあこがれを感じさせたようである。

その時分千日前で十銭出して入った電気館や世界館などいろんな活動写真小屋では、いわゆるジンタ（大阪では単に楽隊）が映写中に演奏していた。クラリネットにコルネット、大太鼓に小太鼓の編成で、例の有名な「美しき天然」などが最もポピュラーであったが「カルル王万才」などのマーチ、アメリカの「マーチング・スルー・ジョウジア」「ウイ・ウイル・ラリー・ラウンド・ザ・フラッグ」スコットランド民謡の「ランド・オブ・ザ・リール」だの「イ・バンクス・アンド・ブレース・オブ・ボンニ・ドウン」だとか、フランスのワルツやカドリールなどの舞曲等々。これらは後になって原曲がだんだん判ってきたので初めから曲名が知らされていたのではないが、何れも自然に発散する異質の情緒は、私のエキゾテイズムを（映画と一緒に）そそり、はぐくんでくれた。なつかしい思い出である。

中学へ行く事になってからも、週一度の音楽の時間が三年まであった。教え方も内容も小学校時代の延長で無味乾燥、音楽を知り、音楽を愛する事を教えてくれる人は先生の中になかった様である。所が大正三年に中学五年の時、私の音楽経験が突然拡大した。中学校の専任音楽教師として元四師団軍楽隊でバリトンチューバを吹いていた人が赴任して来られ、この先生の指導で同級生七、八人が集まって男声四部合唱を初めて試みたのであった。和声の美しさ合唱の面白さ、楽しさを知り、そして体験したのはこの時からである。この先生に後にはピアノの手ほどきをして貰った。これで私の音楽に対する理解が格段に伸びたと思う。

追想

会長 山中直一

大正8年卒

音楽への道

そこへだんだん優れた音楽を聞く機会が増えてきた。中でも大正二年の秋に大阪北浜にあった帝国座（建物の外部は住友ビルの東向いに、この間まで残っていたが今取りこわされつつある）で、上の妹が通学していた相愛女学校のスポンサアで音楽会が催された。イタリーの声楽家サルマリー氏、北欧人らしいピアニストのパプロフスキー氏にヴアイオリニストのズブラウイツチ氏、この三人の欧州直輸入の生の音楽を聞く事が出来たのは、私の生涯の感激だったようである。ピアノ曲やヴアイオリン曲はあまり高くて、異質で、近より難く尊いものに覚えたが、サルマリーのベルカントは私を夢中にした。このサルマリーは東京の帝劇で三浦（当時は柴田）環女史とカヴレリア・ルステイカーナを日本で初めてやった人で、後に私も彼女のトソドウや、リゴレットの女心のカンツオーネなどを聞いて大いに陶酔したものである。この辺りから私が音楽の道に直進する運命が決った様である。

オケ沽動

大正四年に私は神戸高等商業学校に入った。申す迄もなく神戸大学の前身である。昔から関西で一番始めに西欧の文化を取り入れた港町であり、外人の在留者も多く、何かと外国の香りの高い神戸の事だから、音楽でも進歩的な学校だろうと幾分期待していたが、音楽については案に相違の未開発地だった。尤も在留のアメリカ人達は、同好者が集まってコンサートをやったり、後には「天地創造」や「エリヤ」等々オラトリオを演奏したりした事はあったが、神戸高商の学生は至って土臭く蛮カラな諸君も多かった。それが又皆の誇りであり、又保存に努めた重厚味でもあった。以前二、三回生の時に既にあったというグリークラブは当時たゞの二人に減ってしまっていたし器楽の方はまるで今でいうクラブ活動はなかった。よし、是非開拓しなければならぬと思った。この年しか本科一年の諸君（伊藤、山崎、宮崎等の諸先輩）が提唱されて、ヴァイオリニスト遠藤和一氏を迎えて、ワグナー・ソサイエティという器楽合奏団を創設されたのが特記さるべき事だと思う。この遠藤和一氏は当時関西で初めてサラサーテの「チゴイネル・ワイゼン」を弾いたというので有名だった楽人である。私は亡き級友嘉納悌治君と共にマンドリンをかかえてこの団体に入り、時々ピアノの伴奏を受持った。ここで私は編曲の方法を多少学びとったと思う。

大正五年本科へ進んで始めて部員を募って「グリー・クラブ」を拡大し、次いで器楽の方もやれる楽器は何によらず悉く持寄って合奏団を造った。名前だけは超一流のフィルハアモニック・ソサイエティ。それからの苦心や笑い話は前にも書いた事があると思うし、書くほどに思い出すほどに気忙しくなってしまうのでやめにする。誠に若気の至りであり、当時の鳥なき星の蝙蝠の羽ばたきであった。当時の同人諸君は皆音楽を愛し、協力を楽しむこと、今日の諸君と変りなかった。思い出は楽しい事のみである。私の置かれていた音楽的環境が当時の関西として案外進んだものであったこと。そんなことから、今日のオケや、グリーが神戸大学の地に深く根ざす機縁の一つになり得たことを私は幸福に思っているのである。

（昭和三九・一一・五）

住所変更

吉田　昭（L2）　勤務先：西宮市　小堀建設

中本規久生（E2）
勤務先：P.O.BOx 4040 Karachi,Pakistan Liaison office of Nisso Co.L.T.D.in Karachi

西本　寛（Pb 6）
勤務先：大阪市天王寺区宰相山町149　中本洋紙店

塩谷雅彦（Pb 6）
勤務先：神戸市葺合区野崎道8の33　葺合中学校

辻本博司（T7）
住　所：藤沢市亀井野1668の6

提　昭二（T9）
勤務先：大阪市此花区桜島南の町17　日立造船K.K.
桜島工場　船舶部電気課（461）2231
住　所：豊中市桜塚本通1丁目2　日立造船　豊中寮

中島良能（B11）
勤務先：大阪市北区天満橋筋5の68
橋本食糧工業㈱　業務部管理課（351）2951

真期英俊（P12）
勤務先：大阪市福島区海老江上1丁目　大日本製薬技術部才二課

笹井邦彦（T12）
勤務先：大阪市西区九条南通1丁目　大阪市交通局
技術部工務課技術係（541）1101（内線）6-308）

四年生の就職先

松永　明
松下電工株式会社
松本　弘
大阪府土木課
広田邦夫
神戸大学工学部土木課大学院
藤本恭子
塩野義製薬KK

＝ホラ吹のホルンより＝

バスが上っていく途中眼下にしだいにひろがっていく夜景は、百万ドルの夜景。

練習の行き帰り一日の疲れをいやすこの光の渦は、東へ西宮をめぐり尼崎大阪堺の彼方まで　光の行列となって　点々と続く。

今年の一年生は学舎統合の影響か二十名ほど現在残っている。今まで一学年あたり十人であるのに。この調子でいくと三年後には八十人のオーケストラになる。それまでは大変かもしれないが、末頼もしい事だ。延々と続く光の渦の如く　オケの年輪は、一段とその精彩を増していくようである。よりよい音楽を　よりオーケストラらしいオーケストラを我々の望みは、貪欲につきない。

編集後記

拙たない新聞を二号としてだす事になりました。変てこな物をつくってしまったという気持でいっぱいです。

編集委員　片井宏至　平島直子　他数の部員　原久美子